

日本再生・六十一

フランス・ユマニスム

の精神

立ち花たばな 隆たかし

(評論家)

熊本地震のちよつと前に、新宿のゴールデン街で不思議な失火事件が起き、四棟三百平方メートルばかりを焼いた。火事との結び付きは不明ながら、住所不定の浮浪者が建造物侵入容疑で逮捕されるという事件も起きた。その日見るともなしにテレビを見ていたら、ゴールデン街の特異さが説明される中で、客に文化人が多く、私がバーを聞いていたこともあったと説明されていた。それは事実である。一九七一年前後、私は

「ガルガンチュア立花」というバーをあそこで開いていた。それは「田中角栄研究」を書くちよつと前の頃で、私は駆けだしのルポライターとして、文藝春秋、講談社などの雑誌に記事を書く一方、それだけでは食えないので、あそこで小さなバー（客席八席）を経営していた。

大学時代の友人四、五人が金を出しあつて面白半分小さなバーの経営権を買ったのだ。私はあまり金がなかったので、カウンターのの中に入り、客の相手をする（酒を作り、料理も作った）役まわりだった。客はほとんどがマスコミ、出版界の知り合いだったが、それなりに儲かった。店は今でもゴールデン街の一角にちゃんとある。ガルガンチュアの名は、ラブレールが書

いた伝説的に有名な暴飲暴食の代名詞のような怪物（生まれたときから「飲みてエ、飲みてエ」とわめきちらしていたという）の名前からとった。

ガルガンチュアは、テレームの修道院を作り、そこで修道僧たちに課した唯一のルールが、「FAYE OUE VOUD RAS」（フェスク・ウドラ＝汝の欲するところをなせ）であつたという。この標語は、フランスではフランス・ユマニスムの自由の精神を体現した言葉として広く知られている。要するに「やりたいことをやれ」ということだ。それは同時に「やりたくないことはやるな」ということでもある。これぞフランス・ユマニスムの中心命題だつた。そこでこの標語を大きな板に彫つて、店の奥にドンとかかげ

た。この標語通り、店の中には絶対自由な言語空間があつて、客たちはみな一晩中ムチャクチャな異論極論の激論をたたかわせあつた。

この標語は中世ラテン語だから、ふつうは誰も読めない。ところが客の中でこれをスラスラと読んで、「オッ、ラブレールじゃねえか」といった男がいた。講談社で後に週刊現代の編集長になり、「日刊ゲンダイ」の創始者にもなった伝説的編集者、川鍋孝文だ。彼はガルガンチュウ物語の訳者渡辺一夫の一番弟子を自称（真偽不明）していた。もう一人は当時フランス大使館の書記官とル・モンド紙の東京特派員をかかっていたブル・モンド紙北京特派員。フランスのインテリにとつて

“FAY CE QUE VOUDRAS”は常識中の常識に属する言葉だった。彼は実は著名な映像作家でもあったから、後に

“FAY CE QUE VOUDRAS”をそのままタイトルにしたビデオ映画を作り、この標語は戦後の焼野原から生まれたゴールデン街の何物にも縛られない自由の精神そのものを表現するものでもあった。映画では野坂昭如が登場して、ゴールデン街の歴史と赤線・青線地帯の解説を語った。私もガルガンチュアの店主として登場し、この地域の特殊性（オカマバー地帯でありながら昭和戦後文化の中心的担い手たちの巢窟）を語っている。

ある時期から、ゴールデン街は外国人に最もよく知られた地域になり、外国人観光客

に東京で行ってみたいところのアンケート調査をすると、ゴールデン街がトップにくるという。

ペドロレットティが作ったなんとも怪しげな雰囲気をもたせよさせたゴールデン街紹介ビデオは、日本人がほとんど知らないうちに、外国人の手から手へと次々にわたり、ゴールデン街という不思議空間の名をどんどん広めたらしい。

よくよく考えてみると、“FAY CE QUE VOUDRAS”のガルガンチュア精神は、私の人生において私の生き方を導くような役割を果たしてきた。だから、最近朝日新聞の夕刊で「人生の贈りもの わたしの半生 ジャーナナリス

ト・評論家 立花隆」という連続インタビュー（全十五回）が載ったが、その四回目

の「欲するところを為せ」と、最終回の「やりたいことやれる社会であれ」の両方で、この標語を登場させている。

この連続インタビュー記事を通読してみると、自分のことながら、私は結局やりたいことをやる（やりたくないことはやらない）精神だけで生きてきた人間だと思ふ。その精神を貫くために、私はせっかく入った会社（文藝春秋）

もやめたし、一時つとめた東大特任教授の職も捨てた。本当につらぬいたのは一介のものの書き精神だけだった。

私は文学青年と文学少女が結婚して生まれた子供で、父親はずっと出版界（書評紙）

で生きてきた人間だから、出版界・文筆業界は、私にとつて子供のころから一種のファミリー・ビジネスのような世

界に見えていた。だから、会社や大学はやめても一介のものの書きとして生きるのが今でも一番性に合っている。

文藝春秋に入社後、ほとんど毎週のように、長短さまざまの記事を書き、いつのまにか、それがなりわいとなっていった。しかし、週刊誌の記事のライターになれば人生満足かといえ、そうではなかった。もつともつと知りたい

ことが山のようにあった。読みたい本が山のようにあった。もうちよつと中味があるものを書きたいという望みもあった。そこで文藝春秋を二年半で退社し、大学に戻って、哲学科に学士入学した。

だからといって哲学教師になる気もなく、その後、私はたつきの道として調べて書くことを、文藝春秋、講談社など

の週刊誌、月刊誌などを舞台にコツコツと続けた。そのうちに『田中角栄研究』を書くにいたり、今日にいたったというのが私の半生だ。

この世界で長年生きてきた人間として、言いたいことは戦後日本の文化の伝統においては、何をしたっていいじゃないかの自由人の伝統と、オカミが権力をふりかざして言論の世界に統制の棒をはめようとすることの衝突が何度も何度も起きてきたということだ。マスコミ報道の自由をめぐって、いま国際NGO「国境なき記者団」から、報道の自由度ランキングで、日本は世界の七十二位という著しく低い評価を受けている。そのニュースに、菅義偉官房長官は、「とんでもない。日本は世界一報道の自由がある国で

す」と憤慨してみせたが、あの頃（『田中角栄研究』の頃）もそうだった。形式的には、日本にはいつでも報道の自由があることになっているが、日本のマスコミ人はそれをしばしば自己放棄（自己規制）して、報道の自由を自ら取り下げてしまうのだ。いままた日本はそういう時代に入っているのではないか。

朝日新聞が坊主懺悔的に謝罪した吉田調査問題、韓国の慰安婦問題みたいなことはずっと前からあった。早い話、朝日新聞が『田中角栄研究』の後追い報道をしたのは、角栄がロッキード事件で衝撃的に逮捕された後のことである。

今、もう一度、『FAY CE QUE VOUDRAS』の精神を蘇らせないと日本の報道は再生しない。